
詩的結晶体

シェリー酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩的結晶体

【Nコード】

N0484BA

【作者名】

シェリー酒

【あらすじ】

視点をクルクルと変えながら歌うことを止めぬ詩を結晶化してみました。

「明けない夜」——君を失った朝の絶望をノキッと君は知らないだろう——

明けない夜（前書き）

——君を失った朝の絶望を、きっと君は知らないだろう——

明けない夜

明けない夜だつてある
終わらない悲しみだつてある

君のいない世界
君がいなくても
世界は愛に満たされてる
なんて皮肉

俺たちはもう、
終わってしまったつていうのにね

君はいつからか 笑わなくなっていたね
そうしていつも 俺は気づかない振り
息の詰まるような沈黙が
二人の日常になったのは
一体いつからだつたんだろう？

いつだつて君は 愛を求めていたのに
うまく愛してあげられなかったね
恋人らしく 頼り支え合うこと
君が諦め始めたのは
一体いつからだつたんだろう？

明けない夜だつてある
終わらない悲しみだつてある

君のいない世界
君がいないのに
世界は動き続けてる
なんて現実

俺たちはもう、
偶然にだって会えやしないのに

君を失ってしまったから
俺は少し 壊れてしまった
君の幻覚を見るたびに
このまま向こうへ
連れていってくれればいいのにと

過呼吸を起こすたび
このまま心臓が
停まってしまえばいいのにと
思ってたまた泣くんだ
子どもみたいに 馬鹿みたいにさ

そしてまた一日が終わる
夜が来る

君を失った朝の絶望を
きっと君は知らないだろう
首吊った恋人を 引きずり下ろし
硬直しきった身体を抱きしめ泣いた

俺をきつと 知らないだろう

夢の中でしか会えない悲しみ
君も知っていたのかな

一緒に撮った写メも プリクラも
君がすべて捨ててしまったから
俺はもう 記憶にしか縋れない

君の苦しみのもとに

成り立っていた幸せ

ちっとも変えようとしなかった

冷たい恋人 傲慢だった俺を

どうして君は愛してくれたの？

もう今更遅いけれど

どうしようもないのだけど

一生をかけて

こんな俺を愛してくれた君を

本当に、心から

愛しているよ

こんな俺を愛してくれて、
ありがとう

平和のための四カ条、ハーヴェー（前書き）

生きる為に強いられたこと。循環していくのは希望か、絶望か。

平和のための四力条、ハーヴェー

「平和のための四力条」

たとえ何があるうとも、

怨むな

憎むな

忘れる

笑え

「ハーヴェー」

嗚呼、嗚呼、

お兄さまの狂った眼には
キツキツ見えないでしょうが

青い青い星が落ちてきます

青い青い星が落ちてきます

砂原に落ちた星は皆

皆わたくしの傷口に侵入します

侵入してそこにたからものを隠します

見つかつては罰せられるからです

見つかっては罰せられるからです

血流に乗ってたからものは循環します

指先からは消えません

ええ、ええ、

循環します循環します循環します循環します

パッティ・ファンタム（前書き）

破滅を望むこと。破滅を望むまで追いつめられること。ゆえ、享樂的に生きる。

パッティ・ファントム

愛なんて退屈 恋なんて不気味
そんなもので生きるなんてナンセンス
この世はまるで 誂えたかのように
殺戮のためだけに在る

ねえ、
ファウストの夢を視みましょう おねエさま方
キュートな子兎 アルビノちゃんの
臓腑みいんな取り出して
アツアツの鉄板 油を敷いて
やらかいソテーで頂きませんか

焦がれる脳内
ぬめる心臓 あたたかな液体
そつと嚼る幻視にひたる
ずうずうしいほどに幸せな瞬間

破滅は希望で 絶望はひかり
あらゆるものにメスを向けて
血の気の失せた口唇には キスを
小さく震える肩には抱擁
罵言吐きだす白い喉には
キスマークのよな 絞め痕を

愛なんて虚偽 恋なんて非常識

そんなもので生きるなんて ナンセンス
この世はまるで詠えたかのように
殺戮のためだけに在る

さあ、

リーリスの夢を視ましょう おにイさま方
淫猥でセクシーなコの

真白な乳房を切断し

つばさの骨組み 背に埋め込んで

人工天使を つくりませんか？

拡がる傷痕

手首に直線 とまどい傷も

じわり滲み出す 膿の一滴へ

わざとらしいほどに 深く礼拝

平和は狂気で 再生は苦痛

あらゆるものに慈愛を向けて

青く凍りついた眼には 笑みを

涙濡れる頬には舌を

しな垂れかかる豊かな胸には

烙印のよな ケロイドを

だから

夢を視ましょう そのお方

恐慌こそは 至上の快楽
悲鳴こそは 天上の音色

歪んで軋んで 狂いに狂った

この世界だからこそ しあわせになれる

あア 聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな！

今は失われた 清らかな賛歌を口ずさんで

さわやかな朝日 浴びましょう

小さくちいさく 睦言のよに

あらゆるものへの 呪詛囁いて

粉々の少女を 夢視ましょう

あア、聖なるかな！

海、D o l l（前書き）

自死を選ぶのはいつだって少女なのだ。

海 D o l l

「海」

少女がわんわんと流した涙は
石の合間から、山を下り、窪みにたまり
そうして海ができました

できた海を見た少女は
喜びいさんで飛び込んで
（青いワンピースのまま！）
ボツチャーン
と

自殺したのでした

だから海は青いのです
ワンピースの色がとけてしまったから
だから海は青いのです

「D o l l」

もしも貴女のお部屋に
硝子の瞳に ほつれた金髪の
美しい人形がございますなら
そつと抱きしめてあげてください

少女のように
純粋な眼差しでもって

あどけない微笑を浮かべ
どうぞ頬に口づけて下さい

美しい人形は

とても孤独な少女なので

あんまりひとりきりにしておくと
淋しくて淋しくて

自殺してしまうのです

欠如（前書き）

心にぽっかり空いた穴はそっくりあなたの形してる

欠如

どうしてかしら どうしてかしら
あの人のこと 大好きだった筈なのに
後ろ姿しか 思い出せないの

削除できない たくさんのメール
夜になるたび 待ち続ける電話
声掛けられない メッセンジャー

肺の奥が苦しいの
いつの間にか 仕込まれたのか
チクタク チクタク 時限爆弾
いつ爆破するのかしら とひとり笑い
どうでもいいことだったわと また笑う

思い出しくて 思い出しくて
何度も何度も深層領域ダイブして
起動し続けたのに 接続できない
ロックされてる あなたのフォルダ
ああ パスワードがほら 分らないの

どうしてかしら どうしてかしら
あの人のこと 大好きだった筈なのに
後ろ姿しか 思い出せないの

あなたの欠けた あたしの心

あなたのいない からっぽの器
この空白を抱え
あたし どうやって生きていけばいいの

内部記憶装置が 壊れたのかしら
あんなに恋焦がれているのに
こんなに恋焦がれているのに
おはよう の声さえログのどこにも残ってなくて
泣かないで の声もどこかへ消えてしまったのね

瞼の裏見えるのは ホログラム
大好きな人のヴァーチャルリアリティ
だけどアクション 機械じみてて
ウィットですらも 奇怪じみてる

あなたの欠けた あたしの心
あなたのいない からっぽの器
この欠如を抱いて
あたし どうやって生きていけばいいの

リンクなんてない この広い世界で
一人きり ひとりきりであたし
どうやって生きていけばいいの

お幸せに！、（笑）（前書き）

もう前進しかない！　あなたなんてお荷物、いらないの。

無理させてでもそばにいてほしいけど、無理させたくないから、さ
よならだ。

お幸せに！、（笑）

「お幸せに！」

ネイルの剥げた指先より
微妙に割れたペン先よりも
滲んだインクにそっくりな
もやもや歪んだハートのかたち

凹んで涙目 俯きがちで
ネガティブだなんて ナンセンス！
百円片手に あやふやな思い
コインロッカーに閉じ込める

だってだって もうあたし
こんな世界はまっぴらごめんよ
チャームたっぷりの ロールモデルさえ
名前なんて どこにもないの
ああB級・ロジカル・トラジック！

鍵掛けてきた 置き去りの心
どなたか見つけてくれないかしら
今からヨロシク 他力本願
ネガティブハッピー さようなら

もつともつと 腐っていつてよ
どうかどうか お幸せに！

「（笑）」

苦しかったね
寂しかったね
ずっとずっと 辛い思い
させ続けてきたよね

もう、終わりにしようか
今日でメール止めよう

（笑）だなんて だってきみ
もう笑えてなんかいないんだろ？

おやゆびひめ（前書き）

あたしは、あたしのもの。絶対逃げのびてやるんだから！

おやゆびひめ

移民の町で 少女は走る
生きる為に 罪悪感なく罪を重ねて

「どうしたんだい？ リトル・ガール 親指姫」

快樂殺人なんてアホなことが趣味な
子ども好きの青ひげが
ピストル隠し 笑いかけてくる

煉瓦の壁のすみっこで
けたけた涎を垂らしながら笑い
「halleluiah!」と叫ぶ
あの男は白痴 イワンの馬鹿よ

ここは樂園

世界中のブツ売っぱらう 違法オークションや
ニセモノの愛に快樂 クリーンな戸籍
金さえあれば なんでも手に入る
犯罪者の 犯罪者による
犯罪者の為の町

だからあたしも生きる為
真つ白な布団に眠る
お得意様の 痩せた女の子の為に
シンナー
早く混合溶剤届けなきゃ

ここは地上で 一番汚いところ
あちらこちらで響く銃声
僅かに聞こえる断末魔
そんな慣れっこの音を振り切り
闇の中を あたしは駆ける

移民の町で 少女は走る
生きる為に 罪悪感なく罪を重ねて

「親指姫、また運び屋してんの？」
挑発的な 赤いミニスカで気取ってる
魅力的なシンデレラたちは
今夜もせつせと客引きしてる

黒人の老いぼれ ジプシー婆さんは
金切り声上げ 神の託宣
何度も何度も繰り返す
「もうすぐ津波がやってくるウ！」

景教、儒教に全真教
どのフリークになるのも自由だけけど
でもいくらそんなもの信じたって
腹はちつとも 膨れやしない

救いになるかと 期待してた
花の王子は 頭の沸いた監禁野郎

あんな男なんて絶対イヤ
だからあたしは逃亡中
お金だって 自分で稼ぐの

ここは地上で 一番汚いところ
あちらこちら是不衛生で
排泄物や嘔吐物 色んなものを垂れ流し
そんな慣れっこの臭いを振り切り
影の中を あたしは駆ける

もうこの際 どこだっていいから
遠いどこかへ連れて行ってよ ツバメさん、
だなんて現実逃避
あたしがここでしか生きられない

ねえ 子どもだからって馬鹿にしないで
絶対逃げのびてやるんだから

つめたい、笑み（前書き）

あなた、本当にわたしのこと愛してくれている？

つめたい、笑み

「つめたい」

眩しいディスプレイからは
幸せなんて

伝わってこないよと

あなたは笑ったけれど

遠くに女の声がきこえる

つめたい電話より

きつとずっと メールの方がいい

は、どうせ嘔吐くなら

もっと上手に吐くことね

「笑み」

笑み一つで

誤魔化されてくれるなんて

なんてつまらない男なのかしら

「何処に行ってたんだい」「今日は誰と」

「楽しかったかい」「こんな夜遅くまで」

どんなにしつこく聞いてきたって

私がひとつ 笑んでみせれば

あなたはすぐに 話題を変える

ああ、こんな

形式的な問答なんて もうウンザリ

本気で聞く気もないくせに

興味のある振り しないで頂戴

だから女に逃げられるのよ、つまらない男^{ひと}

亡骸

きみが生きていなかったなら
死んでいたら 亡骸だったなら
周りなんてきつと構わず
きつくきつく抱きしめて
感情露わに 大声上げて泣き叫べるのに

「どうして何も言ってくれないの？」

絶対者に明確な愛を告げて
もしも嫌われてしまったら
疎まれてしまったら
鬱陶しいって 近づかないでって
言われてしまったら と思うと体が凍った

愛してた愛してた愛してた
ただぼくは人より少し臆病で
「好きだよ」としか 言えなかっただけで
誰よりきみを愛してたんだ
何度も何度も伝えようと 書いたメールは
同じ回数消去したから
信じてくれなくても いいけれど

「もう別れよ？
あたしあなたといると疲れるのよ
それにあたしのこと、
そんなに好きじゃないんでしょ？」

否定の言葉が 喉元までせりあげてくる
何て言えばよかったんだ？

「……違うつて、言ってくれないのね」

小さく、本当に小さく絶対者は呟いて
悔しそうに 寂しそうに
きゅうつと口の端を吊りあげ微笑んだ

「さよなら、……もう会わない」

何でなんだろう

最後までやっぱり 上手い言葉は言えなかった
何も言えなかったんだ

ただ嗚咽がこみ上げてくるだけで
声もなく涙が こぼれ落ちるだけで

きみが生きていなかったなら

死んでいたなら 亡骸だったなら

周りなんてきつと構わず

額にやさしくキスしてから

首搔つ捌いて きみとの永遠を選ぶのに

「愛してたのに」って

「ずっと 言えなくてごめん」って

亡骸のきみ相手ならきつと 言えなかった言葉を
全部全部 吐き出せるのに

さよならばくの絶対者

今まで傷つけて
ごめん

亡骸（後書き）

しかして、絶対者は、どちらだ？

切望、解りきったことだけど（前書き）

あなただけが好き。
あなただけが大切。

切望、解りきったことだけど

「切望」

時々でいい

笑って頭を撫でてほしい

冗談でいいから

好きだよって言うてほしい

愛想でいいから

親しいふりして傍にいてほしい

短くてもいいから

お手紙がほしい

理解する気なんてなくてもいい
わかったふりして頷いてほしい

ここにいていいんだよって

私の偏り欠けた心を 否定しないでほしい

「解りきったことだけど」

さよなら さよなら

さよなら 残酷な現実共

このまま進めば終着点は

ビターエンドしか 残ってないわね

ブレーキに油 ちゃんと入れた？

ハンドルきれいに回るかしら？

新しい地図 持ってきてる？

ああだけど

どんなに安全なところでも あなたがいないなら

あたし、行かないわよ

その反対も また然り

R e : (返信)、無題、涙で目の前がじわりと滲む(前書き)

あなたのこと、信じてる。ものすごく信じてる。
死んでもいいくらいに。

Re: (返信)、無題、涙で目の前がじわりと滲む

「Re: (返信)」

どのくらい裏切れば

あなたが離れていってしまうのか

結構本気で試したい気持と

死にそうなぐらい

恐怖する気持とがあって

——今日もまた

返信に、困る。

「無題」

愛情をくれますか

恋情をくれますか

与えること 奪うこともできないなら

ありつたけの執着を

最上級の憎悪という名の関心を

どうか あたしに頂戴よ

「涙で目の前がじわりと滲む」

新着メッセージはありません
新着メッセージはありません

返信すらしないのに
君からのメール待つばかりは
笑いだしたいくらい
ばかりで、

習作・宴（前書き）

あんたがほしかった。あんただけがほしかったの。

習作・宴

切り裂いて 祈り

叶わない愛なら全部全部

噛み砕いて飲み込んで

絨毛じゅうもうのそばに たゆたえばいい

ひとりなんて 怖くないわ

あたしははじめッから一人きり一つきり

だからそう 一個体なのが当たり前

滑りそうに濡れた 包丁の柄えぎゅって握りしめ

冷えゆく毛皮の前に黙祷

ねえ あんたなんてケモノも同然なんだから

あたしの祈りで十分でしょう？

涙なんてウソくさいのよ

あなた方の そんなお綺麗な女優泣きに

信憑性のカケラなんて

これっぽっちも有りはしないの

ひとりだって 寂しくないわ

あたしははじめッから一人きり一つきり

だからそう 何を恐れることがある

ねえホラ 零れた液が

どんどんスライムになってゆく

あんたには見えてるのかしらね
凍りそうに冷たい息や 見開いた瞳
あんた自身のデッド・エンドが

慟哭だつて演技なんですよ？

あなた方の 完璧なカルテットの前じゃあ
笑いさざめき ワルツだつて踊れちゃいそうよ

切り裂いて 祈り

叶わない愛なら全部全部

噛み砕いて飲み込んで

絨毛のそばに たゆたえばいい

両の掌 あんたのスライムそオツと掬い

喉の奥へと流し込む

手に入らないなら食べちゃえばいいの

そしたらあたし達 いつも一緒

だあれも知らないだろうけど

ひとりなんて怖くなかった

あんらを識^しるまで怖くなかった

だからだから

あたしを愛したあんたが悪いの

可愛いあたしをここまで壊した

ひとりのあたしを誘惑しちゃった

あんたが悪いの

ねえどうせ 途切れた耳じゃ

声なんてもう 聞こえないんでしょう？

口唇^{くちびる}あかく染めたまま

泣き叫びながらあんたを掻き抱く

あたしの悲鳴なんて

ねえ、……信じないんでしょう？

じじろ

あなたが教えてくれたのは
可愛い顔文字

ポルノグラフィティ

無邪気は罪っていうことと
酷く空しい 恋の仕方

気づけば いつの間にか
壊れてたあたし

「会いたいよ」なんて 言えなくて
「電話していい？」なんて 言えずじまい

子どもみたいに
優しさ求めるあなたのために
姉になりきり 甘やかし
そうしてあたしは 疲れたの

あなたが教えてくれたのは
真っ当な生き方

無造作紳士

孤独で人は死ぬってことと
燻ぶる想いの 殺し方

気づけば 知らぬ間に
壊れてたあたし

「大好きよ」なんて言えなくて
「ねえあなたは？」なんて言えずじまい

傷つき弱り

庇護を求めるあなたのために
聖母になりきり 甘やかし
そうしてあたしは 潰れたの

恋する自分に酔いたくって

ただ 恋人になりたかったただけなのに
犠牲愛だなんて 最悪

あたしの心はすり減って
今にも割れてしまいそう

例えば ほんのちよっとした衝撃

あと一度 メールが着たなら

あと一回 「助けて」と言われたら
きつとバラバラに 砕けてしまうわ

ねえ 結局のところ

あなたが教えてくれたのは
たった一つ

心侵す 絶望だけ

どこまでもあたしを壊す
絶望だけなのだわ

こころ（後書き）

それでも、まだ、あなたを愛しています。

縋りつき方なんて知らなくて、迷って、切実な

「縋りつき方なんて知らなくて」

救いがほしいのに

何ていえばいいのか

分らない

たすけて、じゃなくて

悲鳴じゃなくて

きっとそれはもっと

さみしい響きの

けして声にはならない

一滴の涙

「迷って」

迷って

迷って

迷って

そして 掴んだものが

虚偽と間違いを

多分に含んでいたとしても

後悔だけは、

したくないと思う

「切実な」

もし本気で僕を求めてくれるなら

苦しいぐらいの束縛を

狂気じみた執着をくれよ

来る筈ないと

ハナから諦めるぐらいなら

好意なんて邪魔なだけ

それぐらいなら 口説き文句なんて鬱陶しい

愛をくれよ

執着をくれよ

本気で僕を必要としてくれるなら

あんたの本気を本当にくれよ

そうすれば、

今度こそ僕はあんたを愛せる気がする

おもちゃの世界

だいすきだったその人の
こめかみにくちびる押し当てて
トリガーに細い指をかけ
あたしはズドン！とあたらしい
世界開会の合図をする

ママレードのような声で
ハレルヤを歌う

フェルトでできた聖歌隊の
少年たちへ花束の代りに
髑髏の指輪をプレゼントする

「They are toys
They are toys」

みんなミニチュア
そうよおもちゃ

だから何をしたらつかまわない

銀色の虫が羽化したような
安全ピンで縫いとめられた
白い手首のその先で
みずいろのネイルを煌めかせ
少女たちは写生しつづける

「They are dolls
They are dolls」

みんなミニチュア

そうよ人形

だからぼろぼろにしてもかまわない

あんなにすてきだったその人も
目を離れたすきに

おもちゃに変身してしまって

あたらしい世界を信じなかったから
こわしてしまうしかなかったの

そうよ

あたらしい世界

あたらしい樂園！

女の謀略の限りをつくし

あたしはアダムの子どもを産むの

そうよ

安定剤のカクテル飲んで

脳味噌をぜんぶプディングにして

きれいなピストル高らかに

あたしは最後の神さまになるの

おもちゃの世界（後書き）

狂っているのは、彼女か、世界か。

s i n k

ひとの気持ちも知らないで
小石の、ビー玉の、合間から
生まれては消える
泡の音に誘われて

水槽の底へゆつくりと
沈めてゆく記憶

大切な記憶
それは指輪のかたちした
本気の恋の、なれのはて

ふわり、ゆらり
光りを反射し
白を纏うのはこれで最後
するり、きらり、
何も知らずに
泳ぎ、たゆたう、ネオンテトラ

愛したひとが
誕生日に贈ってくれた
ターコイズの指輪を外し
そっと
水槽へ、落として

一生分の恋と

一生分の悲しみをくれた
あなたの為に
惨めなんかにならないよう
私はあなたへさよならをする

ひとりきりの別れの夜
涙が一粒零れおち
さみしさの名前
乾いた唇で刻んだのは
青い月だけが知っている

s i n k (後書き)

沈めて。

みんな、みんな、沈めて。

最後に残るのは、何なのかしら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0484ba/>

詩的結晶体

2012年1月13日13時48分発行